

(3) 森町石倉2遺跡出土のイルカ頭骨片について

1) イルカ頭骨の出土状態

石棒の破片が散らばった面の下部から、半割された丸玉とともに焼骨片が110数点散乱して出土した。そのうち部位が判明できるものが10数点、まったく判明できないものが約100点である。これらの焼骨片は頭骨片がほとんどで、それ以外の部位片は検出されていない。この焼骨片を金子浩昌氏に鑑定をお願いしたところ、イシイルカの左右の後頭頸、胸椎体などで、1個体分のイシイルカの頭部と同定されている。ただ、注意すべきことはイルカの歯が検出されていないことである。

イシイルカの頭骨は出土状態、焼骨片の破碎面などを観察すると、火を受けて割れたものではなく、ある場所で石などで叩き割り、細かく碎いたうえで住居の南側の床面に散布したものと思われる。

2) イルカ頭骨と住居の焼失

イシイルカの骨・丸玉・石棒の出土状態からうかがえることは、三者を一定の場所で打ち碎いたうえで、屋内にイシイルカの頭骨片・丸玉の半割片を撒き、その次に石棒の破碎片を住居の北東側から南側にかけてばら撒いたものと思われる。そのような行為を終えた後に住居に火をつけ、全焼させたあとに住居のほぼ中心に完形土器を置いたものと推論している^{註1}。

この焼失住居について、住居内の居住範囲のある特定の人間が死亡したためか、それともこの土地から離別して他の場所に移るために淨めの儀式を行ったかを確定しうるものは今のところ見当たらぬ。ただ、ここに住んでいた当時の人々がイルカに対する「思い入れ」をもっていたことがうかがえそうである。したがって、ここでは縄文時代のイルカに焦点をあて、それをめぐる諸問題についてふれることとする。

3) 縄文時代におけるイルカ獵について

イシイルカは小型の歯クジラで、体長2.2m、体重220kgに達し、ネズミイルカと同じ寒冷海域に生息する。本種は外洋性で動きが速く、5～10頭の群をなし、陸岸に近寄る場合は大群を形成しない。性成熟前の若い個体は、船首波に戯れてくるため、突きん棒の格好の対象となっている^{註2}。「現在三陸沖では、イシイルカを突棒漁法」^{註3}で捕獲しているが、「縄文時代にはスピードの出る船がなかったため」^{註4}捕獲しえなかつたといわれている。しかし石倉2遺跡では銛頭・舟形土製品^{註5}などは出土していないが、噴火湾が一望できるところに立地し、動物遺存体としてイシイルカの骨が検出されていることから、縄文中期後半にはすでにイシイルカ獵が出現していた可能性が高い。

北海道におけるイルカ獵は、寒冷海域に生息するイシイルカ、ネズミイルカを主要な捕獲対象として、その捕獲方法は舟と銛によって行われていたものと思われる。その捕獲組織は3人前後であろう。東北地方以西のイルカ獵が、主に追い込み漁によって行われていることと好対照をなしている。イルカ獵の捕獲組織と住居の居住集団の規模は相互に関係し、そして集落を構成する住居の単位を規制したものと思われる。北海道における縄文時代の銛獵は、トド、アザラシ、オットセイだけではなく、イルカも対象としていた可能性があり、縄文時代の生業の組み合わせを考えるうえで、見過ごしてはならない問題である。

4) 縄文時代のイルカ儀礼

縄文時代中期後半で、石倉2遺跡のようにイルカの頭骨が破碎されて住居床面から出土した例は、今のところ他では発見例はない。ただ島牧村栄磯岩陰遺跡で、マイルカ科の一種が「V層で頭蓋骨片、VII層で肢骨片と下顎骨片」^{註6}が出土し、さらにバンドウイルカの歯を「V層とVII層」^{註7}で各1個採集している。歯は「歯根末端の閉鎖しない若い個体のものである。他には、このイルカ類に見合う椎骨、肢骨などはみつけられなかった」^{註8}と報告されている。第V・VII層は縄文中期末葉の時期である。遺跡

の性格は岩陰で、住居跡などは検出されていない。しかし、イルカの頭蓋骨片が検出されていることから推論すると、イルカの頭骨を割っていることも考えられる。今後、縄文中期後半以降におけるイルカの骨の出土状態に注意を払う必要がある。

次に参考例として、縄文時代前期の東釧路貝塚、オホーツク文化期の香深井遺跡のイルカ頭骨出土例についてふれる。東釧路貝塚では、ネズミイルカの頭骨が「放射状に並んで」発見されている^{註9}。頭骨は約7個体で、いずれも穿孔あるいは破碎はされておらず原形をとどめている。歯が残存していたかどうかは不明である。屋外儀礼のひとつのあり方を示している。香深井遺跡では、石積み遺構からゴンドウクジラの頭骨が7例、カマイルカの頭骨が1例検出されている。ゴンドウクジラの頭骨は、6例が穿孔あるいは後頭部の破損が認められ、他の1例はその痕跡はない。カマイルカの頭骨は、「脳頭蓋後半を欠損」^{註10}させている。

このような参考例と石倉2遺跡出土例を対比させるならば、頭蓋が部位を特定しにくいほど打ち砕かれているところにその特異性がある。そのあり方からみても屋外儀礼とは異なる様相をもっている。いずれにしても石倉2遺跡の出土例は、「縄文人とイルカ」という問題を考えるきっかけとなる資料を提供したといえる。

5) イルカの歯の利用について

石倉2遺跡出土のイシイルカの頭骨からは歯は検出されていない。栄磯岩陰遺跡では、歯のみが検出されている。このことは、イルカの歯が何らかの理由で抜き取られている可能性がある。民俗例として、ソロモン諸島のマライタ島ではイルカの歯が装飾財として利用されている。すなわち「祭りや儀式の際には女たちはイルカの歯と貝貨を組み合わせた装飾品を身にまとう。……なかでもロダラと呼ばれる頭に巻くバンドは、貝のビーズとイルカの歯が緻密な模様に組み合わされ、とてもみごとなものである」^{註11}と報告されている。これまでサメの歯は問題にされていたが、イルカの歯については注目されていない。イルカの歯の利用^{註12}についても検討を加えていく必要があるのではないだろうか。

(種市幸生)

本稿を執筆するにあたって、東京国立博物館 金子浩昌氏、静岡学園短期大学 中村羊一郎氏、大船渡市教育委員会水見淳哉氏には諸々御教示いただき、記して謝意を申し上げます。

註1：本報告書75ページ参照のこと

註2：粕谷俊雄・金子浩昌・西本豊弘 1985「動物学」『季刊考古学』11号。p93・94参照

粕谷俊雄 1980「イルカの生活史」『アーニャ』9月号。No.90。p18参照

註3・4：宮崎信之 1986「イルカの生態・種同定ならびに利用価値」『石川県能登町真脇遺跡』p371

註5：西本豊弘 1993「海獣狩猟から見た津軽海峡の文化交流」『古代文化』vol.45

戸井貝塚出土の「舟を模した土製品」を、西本氏は「丸木舟に更に側板を補強」していることから、「磯まわりだけではなく海峡中央部まで乗り出していた」と考えている。噴火湾におけるイルカ猟は、西本氏が述べるように「オットセイやアシカなどと同様に鰯猟」と思われる。その初現は、縄文前期ということも考えられる。

註6：金子浩昌 1973「骨・角・牙・貝製品」『栄磯岩陰遺跡発掘報告』島牧村教育委員会。p49・50・60

註7・8：同上 p60

註9：釧路市立郷土博物館 1980『東釧路の貝塚 一先史時代の釧路一』解説シリーズ1 p15・16

註10：大井晴男・西本豊弘 1976「X 石積み遺構とその遺物」『香深井遺跡 上』大場利夫・大井晴男編 p400・401

註11：秋道智彌編著1995『イルカとナマコと海人たち』p105

註12：ただ、イシイルカ・ネズミイルカの歯は抜け易いことを考慮にいれるべきであろう。

引用・参考文献

(1) 論文・報文等

- 大島直行 1994 「縄文時代の火災住居—北海道を中心として—」『考古学雑誌』第80巻第1号
大島直行 1999 「縄文時代火災住居の意味」『考古学ジャーナル』No.447
鈴木克彦 1976 「東北地方北部における大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』8
鈴木克彦 1999 「北海道渡島・桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』第35輯
吉崎昌一ほか 1979 『聖山—北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査—』
北海道大学教養部人類学研究室 報告 No.1

(2) 単行本等

- 浅川滋男編 1998 『先史日本の住居とその周辺』同成社
坂口 隆 2003 『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書⑤
鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
村越 潔 1984 『増補 円筒土器文化』雄山閣考古学選書10
森町 1980 『森町史』

(3) 発掘調査報告書

- 青森県立郷土館 1992 『小川原湖周辺の貝塚—三沢市山中(2)貝塚・天間林村二ツ森貝塚発掘調査報告—』
上ノ国町教育委員会 1972 『大安在B遺跡』
上ノ国町教育委員会 1979 『小砂子遺跡』
上ノ国町教育委員会 1987 『大岱沢A遺跡』
知内町教育委員会 1972 『涌元遺跡』
上磯町教育委員会 1981 『館野2遺跡』
函館市教育委員会 1979 『見晴町B遺跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会 1981 『権現台場遺跡発掘調査報告書』
函館市教育委員会 1989 『陣川町遺跡』
函館市教育委員会 1990 『権現台場遺跡』
函館市教育委員会 2003 『豊原4遺跡』
七飯町教育委員会 1979 『峠下聖山遺跡』
七飯町教育委員会 1991 『上藤代7遺跡』
南茅部町教育委員会 1980 『臼尻小学校遺跡』
南茅部町教育委員会 1980 『臼尻小学校遺跡』
南茅部町教育委員会 1988 『臼尻B遺跡 vol.VIII』
南茅部町教育委員会 1996 『大船C遺跡』
南茅部町教育委員会 2000 『安浦B遺跡』
南茅部町教育委員会 2002 『大船C遺跡 ハマナス野遺跡 vol. XVII』
森町教育委員会 1975 『鳥崎遺跡』
森町教育委員会 1985 『御幸町遺跡』
八雲町教育委員会 1995 『栄浜1遺跡』
北海道第四紀研究会 1974 『西股』
北海道埋蔵文化財センター 1987 『函館市石川1遺跡』 北埋調報45集
北海道埋蔵文化財センター 1987 『函館市桔梗2遺跡』 北埋調報46集
北海道埋蔵文化財センター 1986 『木古内町新道4遺跡』 北埋調報52集
北海道埋蔵文化財センター 2002 『八雲町落部1遺跡』 北埋調報181集
北海道埋蔵文化財センター 2002 『森町本内川右岸遺跡』 北埋調報182集
北海道埋蔵文化財センター 2002 『森町濁川左岸遺跡—B地区—』 北埋調報190集
北海道埋蔵文化財センター 2002 『森町本茅部1遺跡』 北埋調報191集